

「老い」「の厚みと広がり」を捉える

東京大学大学院教授

川本隆史



かわもと・たかし

1951年、広島市生まれ。1980年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程を単位取得退学。1997年、東京大学より博士（文学）学位取得。跡見学園女子大学文学部、東北大学文学部を経て、2004年度より東京大学大学院教育学研究科教授。専門は社会倫理学と応用倫理学。単著に『現代倫理学の冒険』（創文社1995年）、『ロールズ』（講談社1997年）、編著に『新・哲学

講義6 共に生きる』（岩波書店1998年）、『応用倫理学講義4 経済』（岩波書店2005年）、『ケアの社会倫理学』（有斐閣2005年）、共訳書にアマルティア・セン『合理的な愚か者』（勁草書房1989年）などがある。

はじめに

2007年度の日本倫理学会第58回大会が10月12日から3日間、新潟大学で開催される運びとなっている。最終日の全体会で討議される論題（「共通課題」）は、ズバリ「老い」。このテーマ選定については、全国紙で報じられるという栄に浴した（『社会との接点 模索する哲学』、『朝日新聞』7月12日朝刊・文化面）。しかも、今年度の日本哲学学会が「ジェンダー」および「ケア」を、日本倫理学会が「老い」を取り上げていることに関して、「現実から離れた抽象的な議論が哲学の神髄とされてきた伝統からすれば、一段も二段も下にみられてきた具体的な問題を俎上に載せること自体、様変わりといえる」との好意的な論評が付されていたのである。

この共通課題の設定と実行に関わってきた者のひとりとして、アカデミーの外部からこうした反響を頂戴したことは喜ばしいし、ぜひ成功させたいとの思いがつのる。読者に対しては大会の事後PRを提供する無調法をお断りした上で、本稿では「老い」という難題に本学会が挑戦するにいたった経緯や意図および準備状況をレポートさせていただこう。

1. 共通課題「老い」の趣旨と構成

日本倫理学会の共通課題は、「共通課題設定委員会」（4名・任期2年）が会員アンケートおよび評議員会での討議を踏まえて翌年のテーマを選りすぐり、4月の評議員会に提案するところからスタートする。今回は「仕事・職業・労働（の意味）」、「グローバル化」、「老い」という3つの問題群の中から絞られた（2006年4月）。

テーマが確定した段階で直ちに「共通課題実行委員会」（4名）が組織され、プログラム原案の策定に入る。個別報告の主題と本数を定めたプランを練り上げて、全評議員に報告し候補者の推薦を求めた（同年7月～8月）。8月末の評議員会における実行委員

会原案の審議・承認を経て、6名の報告者が決まる。10月の第57回大会（東京大学）で実行委員を含む全メンバーが初顔合わせ。そこからは電子メールを活用して、報告内容の調整や意見交換を重ねて、現在にいたっている。

まずは会報に公示された課題設定の趣旨文を引いておく。主眼は、学会の総力を挙げて「老い」の厚み（個別性）と広がり（普遍性）を捉え、世代間の倫理の編み直しに挑もうとするところにある。

少子高齢化社会到来の危機感が煽られ、年金や介護保険制度の改革が叫ばれている傍らで、現代の「老い」はますます多様化し、高齢者の暮らしの「格差」も拡大の一途をたどっている。そうした現在にあって、「老い」を若さや能力の減退として見切り、保健医療や人口統計の対象として扱うのではなく、その積極的な価値を掘り起こし、世代間のつながり・支え合いの倫理を再編成する作業が人文学（とりわけ倫理学）に求められているのではあるまいか。本共通課題は、古今東西の倫理思想を探究してきた本学会の叢智を結集し、「老い」の厚みと広がりを解明することをねらいとする。

次に報告者と題目を掲げる。6つの個別報告（各25分）を3つのグループ——(1) 洋の東西の伝統思想に「老い」を生きる知恵を探り当て、(2) 文学にあらわされた「老い」を日本中世と現代文学から読み取り、(3) 社会学および思想史の観点から「老い」の倫理に接近する——に分けるという趣向を凝らした。6名すべて男性という偏りがあるものの、ほぼベストの布陣となったと自画自賛している（なお司会者5名中、2名が女性である）。

《老いの伝統》

1. 荻野弘之（上智大学）

西洋思想における老いの諸相

2. 吉村 均（財団法人東方研究会）

老いの苦と仏教——東洋の伝統から

《老いの文学》

3. 木村純二（弘前大学） 隠遁と老い

4. 大町 公（奈良大学）

戦後日本の老いと介護——「介護文学」作品 を手がかりに

《老いの倫理》

5. 天田城介（立命館大学）

「〈老い〉の倫理学」の社会学序説

6. 黒住 真（東京大学）

「老い」について——倫理思想史からの問い

2. 老いの伝統

手もとに届いている報告要旨から、ポイントを紹介してみよう。トップバッターの荻野弘之氏（古代ギリシア哲学・教父哲学専攻）は、西洋思想における「老い」の問題が同時に医学の歴史、病気の観念史と相即してきた史実の確認から取りかかる——「ヒポクラテス派は自然との比較で老年を人生の「冬」になぞらえたが、ガレノスは老いを健康と病気の間位置づけ、老化現象を体液と体熱の相関によって説明する。（中略）他方で古代以来、老年の問題は養生法、長寿法の問題として、あるいは義歯や眼鏡の開発として、様々な生活技術の発展を促した」と。ついで古典古代の老年論の傑作として持ち上げられることの多いキケロの『老年について』（岩波文庫）を検討し、同書は「（引用者が無邪気に想定するような）現代にも通用する標準的な議論とはいえ、むしろこうした議論からこぼれ落ちてしまうような状況に置かれた老年こそが、今や焦眉の問題になっているように思われる」と適評する。

以上のような思想史の概観に基づいて、現代が要請する倫理学の輪郭が描写される——「少なくとも、理性的な行為の主体として普遍的な合理性を背景に

行為する、といった近代的な自律的人間モデルではなからう。むしろ、他者の援助なしには独立に行為できない「不十分な主体性」、経験を重ねることが知識の増大に結びつかない（むしろ時代に取り残されてしまう）ような技術革新、家族や地域共同体に根差すことのない親密な人間関係、などの条件を勘案しながら、改めて「よく生きる」（あるいは幸福）ことや生きることの「意味」を問題にするような地平ではないか。「不十分な主体性」の中身を詰めていく共同作業に、私も加わりたい。

第2報告の吉村均氏（日本倫理思想史・仏教学専攻）は、「老いの苦からの解放」を説いた仏教思想の要諦が「老いは単に否定されるものではなく、苦を苦と感じることが出発点とされていることにある」と指摘する。けれども、苦しみの自覚とそこからの解放という「仏教の実践性」を、和辻哲郎の仏教思想研究（および近代仏教学）は見落としてしまった。「しかし日本仏教にもそのような要素がまったくなくなってしまったわけではない。癌が体中に転移し、阿弥陀仏のおかげで癌をいただいたと喜びの中で亡くなっていった鈴木章子氏の手記（『癌告知のあとで』探究社）などを読むと、臨済系の禅者が評価した妙好人的な仏教が今も息づいていることがわかる」と、吉村氏は判定する。「仏教の実践性」を現代に生かし広げる理路を、さらに探らねばならないだろう。

3. 老いの文学

《老いの文学》に移る。第3報告の木村純二氏（日本倫理思想史専攻）は、『徒然草』から謡曲『姥捨』にいたるテキスト群を考察対象として、「仏教の教理的な理解の方向ではなく、実際に老いを実感しつつ、花や月などの景観を情趣を持って受け止める心の在りようについて、より深く考察する」方向を目指している。木村報告の見通しは、「『老い』の自覚を通じて、花や月の美しさと出会い得るのは、一方では、

やがて訪れる死への不安が美しく不老不死なる世界への憧れを切実なものへと高めるためであり、他方では、それとともに、これまでたどってきた人生の喜び悲しみの一つ一つがあらためて思い起こされ、心に染み入ってくるからでもあると考えられる」というものである。『姥捨』のシテの老女が月に対しておのれの姿を恥じ入る場面を、彼はこう分析する——「古い衰えた己れの姿を自覚し、己れのたどってきた人生の曲折を噛み締めながら、月の美しさに見入り、月の彼方に憧れる。そうした「老いの気品」ともいべき「花」のある姿は、しばしば言われるような老者の知恵というよりは、「老い」ゆえの情感の深さを体現しているのではないだろうか」と。老いにまつわる「情感」の深さ・厚みの解明が求められてこよう。

第4報告の大町公氏（倫理学専攻、近著に『命の終わり——死と向き合う7つの視点』法律文化社2007年がある）は、戦後の「介護文学」の代表作を手がかりに、日本の老いと介護をめぐる現下の問題に立ち向かおうとする。作品を読み解くための補助線として大町氏が活用するのは、岡本祐三著『高齢者医療と福祉』（岩波新書1996年）、早瀬圭一著『長い命のために』（新潮社1981年）、小澤勲著『痴呆を生きるということ』（岩波新書2003年）である。彼は、佐江衆一の『黄落』（新潮社1995年）の主人公の母が選んだ「拒食死」をひとつの選択肢と認めながらも、耕治人の『命終三部作』（1986～1988年、武蔵野書房2006年）と小澤の著書が指し示す〈認知症を生きるということ〉がもうひとつの選択肢になりつつあることを肯定的に評価しようとする。「死の自己決定権」にも「延命至上主義」にも回収されない《生存の技法》をしかと習得すること、これを次なる任務として引き受けねばなるまい。

4. 老いの倫理

3本目の柱は、当然ながら《老いの倫理》と銘打った。第5報告を依頼した天田城介氏（社会学専攻）

は、『〈古い衰えゆくこと〉の社会学』（多賀出版2003年、普及版2007年）および『古い衰えゆく自己の／と自由——高齢者ケアの社会的実践論・当事者論』（ハーベスト社2004年）という大著2冊をもっている。この報告では「〈古い〉はいかに在るべきか」を価値づけるという課題の困難さを見据えつつ、まず〈古い衰えゆくこと〉とは「老年期における個人の身体の「ままたらなさ」を第一義的に意味する現象」であり、「自らの意思とは無関係に、意思に反して当事者に襲いかかって来るような、あるいは自己にとって制御不可能で「主体」それ自体を剥奪されるかのような——自己による統制・馴致不可能であるような——〈現実〉のモメントなのである」こと、その意味で私たちの社会においては〈古い〉は言わば「根源的な暴力性」を内在しつつ立ち現れるという消息を浮き彫りにする。そこからさらに、身体の〈異なり〉として〈古い〉の現れを感受可能にしている基底的条件としての《身体の物質性》に目を向け、そこに内在する《生存する力》こそが私たちの存在を可能にしている「根源的贈与」なのではないかとの示唆に進む。「根源的贈与」とは「私たちはなぜだかこの身体を与えられ、重力・空気・水・食物などを享受することが可能となっている」という事態を名指したものであり、これが天田氏の問題提起の核心に位置している（と私は受けとめた）。

第6報告の黒住真氏（日本思想史・比較思想宗教専攻）は、人生・生活をまず人間にとっての近代化以前・以外の基礎的な流れ・あり方として振り返ってとらえ、そこにある老いを倫理的に問おうとする。黒住氏によれば、「かつて老人・老女は、妻々深い経験者・生活者・記憶者ととらえられた。だからこそ、老人は、しばしば「賢者」として尊ばれ、また「翁」として、あるいは「長老」として人々において重視・尊敬された。（中略）そもそも、老人たちは少なくともどうでもよい・仕方のないものではな

く、さらに関わるべき・養うべき生命とされた」。さらに「聖人・聖（ひじり）論」の系譜にも注意を促した彼は、次のような含蓄ある問いかけで結ぼうとする——「人間は、天地その有機体の中であって、子どもや老人や死者をもち、さらに他の存在者たちをもち、そこで人生を営みよりよく育ちよりよく老いること、そこに本当の当為たるべきものを見出すこと。それこそが人間には必要だし求められているのではないか。それはかつて行われても来た」と。思想史研究者の面目躍如の観がある。

おわりに

本番では以上の6報告に続けて、2時間のシンポジウムが組まれている。冒頭の総括コメントは、実行委員のひとりにして先駆的な論考「老いの倫理学的のために」（『哲学論集』第43号、大谷大学哲学会、1996年）の著者である池上哲司氏（大谷大学・倫理学専攻）が担当する。活発な論争が展開されることを期待したい。なお報告およびシンポジウムについては、学会誌『倫理学年報』第57集（2008年3月発行）に掲載されることになっている。関心を抱かれた読者にあっては、ご参照くださるようお願いする。

そもそも「古い」の倫理や価値に私が注目するようになったきっかけは、国立社会保障研究所長（当時）の塩野谷祐一氏との「介護保険」制度をめぐる対談にあった。その場で「（制度の設計・運用上の技術的な問題に先立って論じられるべき）人生末期のあり方をどう考えるかについて、哲学者・倫理学者の発言が少ない」との苦言を呈されたのである（NHK教育テレビ番組「未来潮流」1996年7月6日放送）。今回の学会運営に携われたことで、長年の宿題（の一部）が果たせるかも知れない。そんな気がしている。

●日本倫理学会ウェブサイト URL:<http://jse.trustyweb.jp/>